



Title	磯崎新の初期都市思想にみる反芸術的性格：美術批評言説を手がかりに
Author(s)	鯉沼，晴悠
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 68-69
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

磯崎新の初期都市思想にみる反芸術的性格

美術批評言説を手がかりに

鯉沼 晴悠 京都工芸繊維大学大学院在学

はじめに

建築家磯崎新 [1931-] は、「反芸術の建築家」としてしばしば扱われる。しかし、単に既成概念に対するアンチ的傾向を論拠とする相対的な記述のみでは、両者に共通する問題意識を十分に検証できていないのではないかな。

そこで本発表では、美術分野に端を発する「反芸術」概念の再検証により、その問題意識における建築・都市計画分野との接地面を明らかにし、磯崎の初期都市思想の内部に反芸術的性格を見出すことを目指す。反芸術の命名者である批評家東野芳明と宮川淳の間で交わされた「反芸術論争」、とりわけ宮川が反芸術の個性的性格とした「日常性への下降」を手掛かりとすることで、当時における言説空間との関係から検討を行いたい。

反芸術作家との交流

磯崎と反芸術作家との交流は、磯崎の故郷大分県にまで遡ることができる。芸術を志す若者によって 1951 年に結成された美術サークル「新世紀群」に磯崎や吉村益信、赤瀬川原平、風倉匠は所属していた。公募展落選者を集めた野外展、機関紙の発刊などの活動や、彼らの маниフェストからは、活動の場を東京に移し、分野を異にしながらもなお、近接した位置にいた両者が持つ既製の価値観の転覆を目指す姿勢が垣間見える。

ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズを中心としたネットワークは、磯崎に固定的な領域性に留まらない思考をもたらした。一方で、1962 年 8 月 25 日に開催されたイベント「SOMETHING

HAPPENS」に着目すれば、彼自身もまたその分野横断的性格の一助を担っていたことがわかる。

このイベントの首謀者であるネオ・ダダと、丹下研究室の人々をつなぐ結節点となっているのは磯崎自身であり、大学での丹下研究室、故郷大分以来の反芸術作家との交流からなる建築・都市と美術をまたぐ磯崎の活動初期における位置を物語っている。

「反芸術」概念の問題意識

1964 年 1 月 30 日に「反芸術」概念の問い直しを目的とした公開討論会「反芸術、是か非か」が開催される。聴衆として参加した宮川淳による評論「反芸術 その日常性への下降」は、反芸術の個性的性格を検討し、美術史的意義を形成した点において、現在における検討に適している。

宮川は、反芸術の特徴として「日常性への下降」を挙げながらも、ジャスパー・ジョーンズらの作品に見られる日常的物品が作品の形態、制作行為を規定する性格に対して、「レアリテの空無化」を指摘している。これらの特徴において、しばしば作品に前提として導入される鑑賞者の存在やポップ・アートに特に見受けられるマス・メディアのイメージを、コミュニケーションへの焦燥のメタファーであるとする視座において宮川は、反芸術を現代の表現と認めていく。

近代的都市計画批判

磯崎は、「都市デザイン研究体」における現代都市分析を出発点とした。敷地が極小に分割されて

いく現代都市において、都市内部の人間が物理的実体の表象として空間を認知していることに着目した磯崎は、これを「シンボルの並置された系列の知覚」と表現している。また、それぞれが無関係に建設・解体される建築の複合体としての都市の性格を踏まえ、現代都市の特徴として多視点性と不定形性を見出した。

一方で磯崎は、機能主義的都市計画において発明された計画手法を「オープン・プランニング」と規定し、それが、単一の計画主体の視点を前提としていることを強調する。空間の均質化によって可変性の獲得を目指してもなお、彼らの都市計画は個人による理想的予測の内部から出ることができない。そのため、不定形性と多視点性によって特徴付けられる現代都市においてはもはや、これまでの都市計画手法や都市空間概念の有効性が保証されていないことを批判した。

ジョイント・コア・システム

磯崎は1960年に《新宿浄水場跡開発計画》において「ジョイント・コア・システム」を発表する。各都市要素を独立的に扱うとともに、それらの連結・解体を行うこのシステムは、現代都市の動的な性格を計画に導入することを可能にした。これは、1962年の《孵化過程》及び《孵化過程＝ジョイント・コア・システム》へと展開していく。

磯崎の批判が、計画主体が都市に内在する日常的営みの複雑さを常に捨象し、図式化することで計画を可能にしてきた、ということにあったのに対して、磯崎は自らの都市認識の中枢に都市の日常性を据えていく。そこで磯崎が提起したのが、彼が「トポロジー空間」と呼ぶ都市の過程的性格を内包する新たな都市空間概念であり、それを作り上げるものが「ジョイント・コア・システム」であった。「ジョイント・コア・システム」の「柱を立て、つなぐ」という形態規定構造によって作り上げられる都市空間は、都市内部の人々による活動に起因して形態を変化させ続けるのである。

磯崎と宮川——終わりにかけて

磯崎の都市認識において中心的位置を占める都市に住まう人々の存在や彼らによる活動は、まさしく都市における日常性であり、磯崎の都市計画もまた「日常性への下降」を辿っている。

日常的要素の導入とともに試みられた、「シンボルの並置された系列の知覚」としての都市空間認知は、都市の記号的把握を目指す「見えない都市」論へと繋がる。現代都市の曖昧さに対するこうした操作は、宮川の指摘に基づけば、都市空間を内部で展開されるコミュニケーションの系として捉えようとする試みと理解できる。「ジョイント・コア・システム」は、こうして捉えられた虚体としての都市を、内部の諸活動に連動した形態規定構造によって実際の都市へと形態化するものであり、実と虚をつなぐ媒体として機能している。

コミュニケーションに対する焦燥を逆説的に表現とする思考法、その過程で生じた日常性の導入は、単なる既成的価値観に対するアンチの振る舞いという意味での「反」芸術的性格ではなく、「反芸術」的性格を構成する固有の特徴であり、今回の検討で磯崎の都市思想にも見出すことができた。

参考文献

- 宮川淳「反芸術 その日常性への下降」『美術手帖』第234号、美術出版社、1964.04、pp.48-57
- 磯崎新「都市デザインの手法」『建築文化』第206号、彰国社、1963.12、pp.51-58
- 磯崎新「現代都市における空間の性格」『建築文化』第183号、彰国社、1962.01、pp.65-67
- 磯崎新 他「エレメントの構成——空間のリズム」『建築文化』第181号、彰国社、1961.11、p.88
- 磯崎新 他「都市の形態とダイナミックス」『建築文化』第181号、彰国社、1961.11、pp.64-66
- 磯崎新「現代都市における建築の概念」『建築文化』第167号、彰国社、1960.09、pp.12-19
- 磯崎新「新宿・淀橋浄水場跡開発計画」『近代建築』第14号、近代建築社、1960.06、pp.35-38